

がんの教室

田中 伸哉

⑨

前回、がんの転移と再発の仕組みを説明した。がんが血液、リンパ液の流れに乗ってほかの臓器に移動し、増殖する。胃がんや大腸がんの細胞は、血液の流れに乗って肝臓に運ばれ転移しやすい。肺がんは、血液の流れが一度心臓に戻って

続・なぜ転移するのか

脳をはじめ全身に送られるので、脳や副腎への転移が多い。

また、がん細胞がリンパ液の流れに乗ると、近くにあるリンパ節に転移を起こす。がんが転移し

酵素ではがれた細胞が移動

たリンパ節は腫れて大きくなるので表面から分かれる。リンパ節転移が起こりやすいのは乳がんなど。胃がんや肺がんなど内臓のがんは、左の鎖骨の上のリンパ節に転移する。左の鎖骨の上が腫れたときは要注意である。先日、健康診断で筋骨隆々の病気になることのない40代前半の男性を診

察した。左胸の上のリンパ節が腫れていたの、慌てて胸のエックス線を撮ったらやはり肺がんが見つかった。

このように、多くのがんが転移するが、ほとんど転移しない腫瘍もある。悪性脳腫瘍である。転移しない理由は分かっていないが、診断後5年の生存率が8%と低い超悪性腫瘍だ。

前回、普段はがっちり



と結ばれているがん細胞がある時はがれ、自由になって血管やリンパ管に入り込むと説明した。細胞と細胞はタンパク質のヒモでつながっているが、ある時、細胞がタンパク質分解酵素を吐き出してヒモが切れる。皆で手をつないでいるのに、1人がつばのように酵素を吐き、周りが嫌がって手をはなしてしまうイメージだ。

動きやすくなった細胞は、血管の壁に向かってまた酵素を吐き出す。すると血管やリンパ管の壁が溶けて管の中に侵入するのだ。

(北大医学部腫瘍病理学教授)